

ピアニスト テノール
上杉春雄と米澤傑
「天は一物を与える？
医学と音楽の二足のわらじ」

日本の医学界に、「東の上杉、西の米澤」と並び称される、2人の鬼才が活躍している。

片や北海道札幌市の大病院で、神経内科部長という激務に携わりながら、プロのピアニストとして、多いときに月間数回のコンサートに出演、CD 5枚をリリースしている上杉春雄。片や九州の鹿児島市で、医学部の教授職にありながらときにはプロのオーケストラの「第九」公演に独唱者として登場、更に故・若杉弘指揮の歌劇「トゥランドット」(ブッチャーニ)では、カラフ王子の大役を務め、最近海外録音で、オペラのアリア名曲集とイタリア民謡を収録したCDまで発売した病理学者・米澤傑である。

こと医学の世界、音楽の世界に限らない。一芸に秀で、一流の地位を保ち続けるのは「至難の業」と言っている。

その地位を得るまでに費やされる長い歳月と膨大な学習量、加うるに地位を揺るぎなく築き上げ、保持するために要求される絶え間なき研鑽の日々―それだけでも、一握りの才能の持ち主だけに与えられた「神の恩寵」と言い得るのではないかと私は思う。

ところが世の中には、とんでもない例外が存在するのである。

上杉春雄は北海道大学医学部を卒業後、東京大学の大学院に進学し、同大学で医学博士号を取得した俊才である。しかも彼は、北大在学中に札幌市でピアノ・リサイタルを開催、ムソルグスキーの「展

覧会の絵」やストラヴィンスキーの「ペトルーシカからの3楽章」といった「超」のつく難曲をプログラムに加えた。

その後、ライヴ・レコーディングを取録した2枚組のLPが大手レコード・メーカーのプロデューサーの眼にとまってCDの発売、TV出演、クラシックの殿堂「サントリーホール」での東京デビュー・リサイタルなど、この人はまたたく間にスター街道「覇進」を開始する。レコード会社によって冠せられたキャッチコピーは「鍵盤の貴公子」で、CDジャケットの表紙には映画俳優と見紛うばかりの美貌のピアニストの姿が印刷されていた。

しかし上杉は、「本業はあくまでも医師」と、あるとき人生の軌

道を見定め、「アイドル的ピアニスト」路線を鮮やかに放棄して、医学修業の道を歩き始める。年齢23、24歳の頃だったと思う。

だが、音楽への思いを断ち難かった彼は何年か後、「アイドルではなく、本格的なピアニストとして世に出たい」と志を立て直し、ウィーンの名ピアニスト、イェルク・デームスをはじめとする内外の名教師の門を叩いて演奏テクニックを磨き、西欧クラシック音楽の神髄を、医療行為を行う傍ら、本格的に学び始めた。

上杉は毎年、東京都心でバッハの「平均律クラヴィア曲集」の連続演奏を縦軸とするリサイタルを催し、新宿副都心の朝日カルチャーセンターで同じテーマのトーク&コンサートを続けてもい

る。鼠目に見えてはいるが、近年のピアニストとしての進境、音楽的内容の充実振り、まこと眼を眩るばかりである。

米澤傑については十数年前から、音楽愛好家としても知られていた東海大学医学部病理学科の名物教授、故・渡辺慶一博士から「九州の同業者に、凄いなチーがいるよ」と、その存在を教えられていた。デビューCDをプレゼントされ、連れ立ってジョイント・コンサートに顔を出したことがある

が、その時は「資質には確かに瞠目すべきものがあるが、まだ荒削り。身体造りと、発声法などテクニックの練磨を続けないと、持っている能力の30%ぐらいしか発揮できていないのではないか」という印象を持った。いまにして想えば、デビュー当時の上杉春雄も、天与の才能の50%ぐらいしか表現できていなかったような気がする。

ところで最近、これも音楽には一家言を持つ順天堂医科大学の内裕雄名誉教授から一枚のCD

が届いた。「米澤教授の海外録音」です。ご試聴下さい。それと彼は、本業の病理学の分野で画期的な研究論文を発表、学界最高の名誉である「病理学賞」を受賞しました」という書状が添えられている。更に近年の「音楽界」での活動状況が、十数枚のチラシとDVDを媒体として、続けて送られても来た。

CDを一聴して私は唖った。歌唱力が以前とは「別人」の感がある。そしてライナーノットに書かれているCD録音実現に至る

経緯―企画と、血の滲むような努力の日々。研究と教授職を人並み以上の水準でこなしながらの快挙であったが、「苛酷な、想像を絶する努力」という解説書の筆者の証言が文中にあった。

上杉春雄と米澤傑―「稀有な才能に恵まれて」と羨めばそれだけのこともかもしれないが、人間、目標を定め、努力を重ねれば、「これだけのことが出来る」という例証を眼の前に提示された思いで、怠惰な私にはまことに衝撃的な経験であった。 □



上杉春雄 Haruo Uesugi
毎日学生コンクール東日本大会2位。北海道大学医学部進学課程に入学。88年、東京EMIから「アルパム」を発売。2003年、再デビュー。2009年、新宿・朝日カルチャーセンターで「バッハ平均律クラヴィア曲集」を見る世界観」スタート。現在、札幌麻生脳神経外科病院内科部長。



米澤傑 Suguru Yonezawa
1950年、徳島県鳴門市生まれ。鹿兒島大医学部2年生のころから本格的に声楽のレッスンを始める。松本美和子らに師事。第23回日伊声楽コンクール入選。2005年、イタリア・サンタマルゲリータ音楽祭で「トゥランドット」のカラフを歌う。平成10年度鹿兒島県芸術文化奨励賞。ODに「誰も棄てはならぬ」米澤傑テノール・オペラアリア集」。現在、鹿兒島大学教授(写真は2002年、ルーマニアで開かれた日本・ルーマニア国交100周年記念ニューイヤークンサートより)

Takeshi Nakano
1931年、長野県松本市生まれ。東京大学法学部卒業。日本開発銀行(現・日本政策投資銀行)を経て、ケンウッド代表取締役。レコード事業、音響機器生産等も担当した。現在、音楽プロデューサーとして活躍するほか、映像企業「アマトナシシ」などの役員を務める。レコード・CDの制作で「ウィーン・モーツァルト」天才の秘密「丸山眞男 音楽の対話」「ウィーン・モーツァルトの秘密」「丸山眞男 人生の対話」宇野浩二との共著として「クラシックCDの名鑑」(いずれも文春新書)などがある。